

NPO 法人

# 全日本語りネットワーク

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 11-1 JR 桐生駅構内  
桐生市民活動推進センター

2013. 1. 30 発行

(Fax) 0277-47-4066 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

## ニュース

### 新しい年も、迷いながらも語りつづけたい

西村敦子（東京都世田谷区）

50年前、大学に進む時、選択肢は決まっていた。中学の担任の影響で、子どもに本を手渡す仕事につきたかったからである。そして在学中に、物語を耳から届けるストーリーテリングに遭った。しかし、その出会いの根はもっと遙か昔にあったことに思い至ったのは、卒業時、留学して児童図書館員になろうとの夢破れ（自分の力不足で）、結婚して次から次へと日本の人口増加に貢献していた頃である。3歳になるかならない長男にねだられ、『エルマーのぼうけん』を読んでいた時、ふいに<榎村治子>という名を思い出した。小学校に入る前から、私はNHKのラジオ番組「私の本棚」で榎村さんの朗読をいつも楽しみにしていた。中身はわからなくとも、たんとと読む中にも強く心に響く声の調子で物語の情景が浮かんできた。大きくなったらああいう人になりたいと思ったのである。

長い前置きになったが、何が言いたいと言えば、物語を耳から届ける手段は、さきの朗読、読みかせ、伝承の語り、素話（ストーリーテリング）、ひとり語り等々と多種多様であり、それらが適材適所に行われ、語り手がプロであれ素人であれ、物語が聴き手の胸に素直に届けば感動が生まれるのである。そして私は素話を選んだ。しかし困ったことに、この頃、おはなしを聴いて私の心が反応しないことが多いのである（自分の語りは棚に上げ）。どういうことだろう。

子どもの想像力を豊かに引き出すには、肉声で物語をまっすぐ飾り気なく語ることはストーリーテリングの神髄だと思う。しかし、語りは生身の人間が伝えるもの。10人10色の妙味があつてこそである。また、語る人の人口が増え、聴き手も子どもから大人と広がっているが、何よりもそこそこ語れるようになった語り手が陥ってはならないのが、自分の語りに馴れ合いになることではないだろうか。決しておはなしに慣れてはいけないのだと思う。するっと語れた時、聴き手に届くまえに、シャボン玉になって飛んで行ってしまう。いつも初めての時のように、真剣に聴き手に向かって心を込めて語らねば（自戒を込めて）と思うのだが。

2年に1度の全日本語りの祭りを楽しみにしている。そこで、形こそ様々であっても、ひとつでも多く、心ときめくおはなしを聴きたいと願っている。

私は伝承の語りで育っていないので憧れるが、初めて感動したストーリーテリングが若き松岡享子さん語るレアンダーだったので、創作物を語ることに惹かれる。幼い頃より心に引っかかっていた「赤い蠟燭と人魚」を憶え始めた。やっかいな文体である。迷いながらも、その文体を何とか自分のものにして著者の思いを伝えられるよう、真摯に語りたい。語りたから、聴いてほしいから。